Victor・JVC
The Perfect Experience

TVF2008
An International Video Contest for the People Around the World
TVF 30th Anniversary in YOKOHAMA

2008 市民ビデオ研究

ＴＶＦ30年 市民ビデオフォーラム❷

「映像づくりで始まる新しい学校教育」

Report

■ 2008.8.2（土）　13:00〜17:30
■ 横浜情報文化センター情文ホール
■ 主催：日本ビクター株式会社　TVF事務局
後援：横浜市　開港150周年・創造都市事業本部
協力：ヨコハマEIZONE実行委員会・横浜市学校視聴覚教育連絡協議会・日本工学院専門学校・情報科学専門学校
湘南映像祭・日本教育新聞社・ 玄光社「ビデオサロン」
市民ビデオ研究会

日本ビクター株式会社
ＴＶＦ事務局

TVF30年記念イベント

「TVF市民ビデオフォーラム」を開催

「市民ビデオフォーラム」開催にあたって

私たち市民が生活している地域や学校、家庭などにある身近なテーマ・題材をもとに、人と人とのコミュニケーションの円滑化や社会へメッセージを発信する市民映像が普及し、インターネットの本格化とあいまって、市民の誰もが情報発信者になれる時代となりました。今回の市民ビデオフォーラムは、学校現場における映像づくりの有効性と実際の成果について確認するためのもので、映像づくりを通してもたらされる種種の学習効果について理解を深めることを目的に開催しました。30年間にわたって東京ビデオフェスティバル（TVF）に寄せられた５万本に及ぶ作品のなかには、学校現場でつくられた参考となる映像作品が多数あります。３部構成のフォーラムにより、そうした作品の変遷の意味、解説や子ども達が取り組んだ時の状況報告など、ご指導された先生方に生の声も発表していただきました。

“映像づくりで始まる新しい学校教育”がテーマ

数名の子どもたちがひと組になり、企画から撮影、そして編集作業を行う映像づくり。その過程で持ち上がる数々の問題に対して、協力しあえるか、アイデアを出せるか――といった乗り越えるための努力が求められ、そのプロセスでは多くの体験があります。他にも、積極性の増長、視野の拡大など、見逃すことができない様々な学習効果を内包している映像づくりについて、あるべき姿の考察から学校現場での有効性までが紹介されました。

会の構成

○第１部　特別講演　寺脇 研 氏

（京都造形芸術大学教授、元文部科学省大臣官房審議官/文化庁文化部長）

演題「総合学習と映像づくりのすすめ方」

○第２部　TVF作品上映＆解説

学校現場から発信された作品はどう進展したか

「TVF作品にみる映像制作と教育成果・課題」

・進行と解説　佐藤 博昭氏（TVF審査委員）

○第３部　事例紹介

実際に行われている各地の事例紹介とディスカッション

「学校現場における映像づくりの実例紹介」

▼映像を使った総合学習とまちづくりとの融合
〈神奈川県横浜市立滝頭小学校/まちの元気づくり支援拠点「夢たま」〉
▼総合学習をきっかけとした映像制作と部活動の展開　〈東京都杉並区立東原中学校〉
▼地域環境問題に取り組む子どもたちの映像制作活動　〈福岡県北九州市立曽根中学校〉
▼地域の問題を映像を通して探求する市民ジャーナリズム　〈長野県大町北高等学校〉
▼美術コースの必須科目となった映像メディア表現の新たな展開　〈神奈川県立弥栄高等学校〉
▼公共広告の手法を使った映像表現と産官学協働活動　〈滋賀県成安造形大学〉

・進行・コーディネーター／下村 健一氏（市民メディアアドバイザー、キャスター）

学校教育における総合学習の第一人者が熱く語る

「総合学習と映像づくりのすすめ方」

ゲスト　寺脇　研 氏

（京都造形芸術大学教授、元文部科学省大臣官房審議官/文化庁文化部長）

profile

てらわき けん　福岡県出身。東大法学部卒後、1975年文部省入省から大臣官房広報調整官を最後に退官までの32年間、初等中等教育局職業教育課長、広島県教育長、高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、官房政策課長、大臣官房審議官（生涯学習政策担当）、文化庁文化部長等を歴任。中でも生涯学習局の設立や生涯学習振興法成立に尽力。また、映画を通じて日韓文化交流に貢献。現在は京都造形芸術大学教授、テレビのコメンテイターとして活躍。教育・映画・落語評論まで多岐にわたり、講演でも東奔西走。「総合学習」「学校週５日制」の生みの親でもある。

近著：『それでもゆとり教育は間違っていない』（扶桑社）『さらばゆとり教育』（光文社）『官僚批判』（講談社）『韓国映画ベスト100』（朝日新書）

職業人を育てるのではなく、人間としてのスキルを育てる

最近、大学の理科系学部に就職する人が少なくなっているという話を耳にします。理科系の学部を卒業した人が社会的に尊敬されていない。会社のなかで評価してもらえないということらしい。でも、もっとひどいのは、芸術系学部の生徒です。芸術系学部を出て芸術家にならなかった人は、学んだことがもっとも評価されにくい。いわゆる「お金と名誉」に結びつきません。

ところが、理科系の学部は志望者が減っているのに対し、芸術系学部は志望者が増えているのです。理科系学部に人気がないことは「お金と名誉」という従来の価値観で説明できますが、芸術系学部に人気があるのは、そういう価値観では説明できません。

私が教えている映画学科も、１学年120人くらいいます。その全員が映画人になれないことは彼等もよく分かっています。それは、就職に有利だからではなくて、コミュニケーション能力やお互いの良さを認めるような「人間としてのスキルに役立つこと」だからです。

大阪の府立東住吉高等学校という高校には、芸能文化科というのがあります。農業高校や工業高校ですらさびれてきているなかで、日本でただ１校、府立高校が芸能文化科というものをつくった。10何年か前のことです。普通の授業もやり、専門科目として歌舞伎や落語を見たりしています。

当時は「これだけ生徒がいても、全員が芸の道に進めるわけじゃないのに、こんな無責任な学校を作っていいのか」という人もいました。確かに、１回の卒業生が40人いたら、芸能の道に進むのは１人か２人らしい。あとはみんな銀行に就職したり、家業の商売を継ぐんですが、もちろん、それでいいのです。

実際にそこの生徒と話をしてみると、全員実に聞き上手なんです。あいの手を入れるタイミングとかがとても上手い。芸を見る経験をしていると、何かを受け止めようという姿勢が養われるのでしょう。だから私も「君たちはすごいよな。どんな職業に就いたって、それだけのコミュニケーション能力があったらやっていけるよ」と言ってあげた。結局、その学校は「職業人」ではなく、「人間としてのスキル」を高めているのです。

実は農業高校だって、農業に就いている卒業生はそんなに多くない。せいぜい１割程度です。しかも、昔は「偏差値が低い子が農業高校に行く」みたいなことも言われ、「そんな高校はなくしてしまえ」といった論調もありました。

もちろん、偏差値が低くいので、しかたなく農業高校に行くような構造は改革しないといけ

ない。しかし、たとえ卒業生の１割しか農業に就かないとしても、農業高校は必要なんです。農業について学ぶことは、環境を知ることにもつながるし、食農教育という考え方にも広がる。そういう知識を得る場所として農業高校があるのです。豊かな時代の教育とは、そうあるべきでしょう。

総合学習における映像づくりでも、同じことが言えます。つくり方を教えるだけでなく、チームで何かをつくる経験だったり、お互いの作品を見て批評し合うなかでのリテラシー能力だったり、コミュニケーション能力などを養うことだったりします。

では、なぜ芸術系の教育をするとコミュニケーション能力が育つのか。根本的に芸術というのはすべて違うものです。AさんとBさんの描いた絵が同じということはありえない。映像作品づくりも、同じものはできない。

学生によく言うんですが「君が将来、世界的な芸術家になるとは限らない。でも、たとえそうならなくても、君の描いた絵は世界中に１つしかないんだ」と。芸術とはそういうもの。１つしかないということを学び、それぞれの違いを学ぶことです。

作品をつくるという行為がもたらすのは、職業的スキルという即物的なものではなく、もっと広い意味での人間的な考え方を学ぶことではないかと思います。

人にはやっていいことと悪いことがある

メディアリテラシーに関して、最近、私は怒っていることがあります。「インディ・ジョーンズ クリスタルスカルの王国」という映画をご存じでしょうか。映画のなかで核兵器を使って、観客をハラハラさせるわけですが、あえて核兵器を必要のないところで使っている。映画がはじまって10分くらいのところのシーンです。

結局、何をやってもいいのかということなんですね。私の映画評にも「こういうものをつくる奴らは人間としてクズだ」と書きました。彼等は職業人としては優れているかもしれないし、優れた技術を持っている。でも、人間としてやっていいことと悪いことが分からない。教養というのは、知識の量ではない。知識に基づいて、やっていいことと悪いことが判断できる能力のことです。要するに、映像づくりでも大事なことは、映像のスキルよりも、写していいものと悪いものがあるということ。それが分からなければ、根本が分からないということになります。

共同通信の人に聞いたら、広島や長崎の原水爆反対の団体の人でも「たかが映画なんだから、別にいいじゃない」って言っていたらしい。私もさんざん言われました。「なんであんなに怒っているんだ」と。最近のアメリカ映画は、特に9.11以降は、自分たちが正しくて、それ以外は悪という姿勢が増えてきています。インディ・ジョーンズの映画の後半にはもっとひどい部分があって、中南米の人たちが未開人であるというような描写がある。メキシコやペルーからはかなり抗議があったようです。でも、知らない人がみれば「あんなもんだろう」というふうになりかねない。

「たかが映画」といいますが、言うまでもなく、ナチスドイツがベルリンオリンピックの映画「民族の祭典」をつくって利用した歴史もある。アメリカ人だってテロとの戦いを正当化するためにそういう映画をつくっている。映画の政治利用は、昔から行なわれているんです。

それはなぜかというと、やはり映像の訴求力がすごいからです。本で読むよりも大きな影響力がある。「納豆で痩せられる」と本で読むより、テレビで見せられたほうが説得力があるでしょう。つくり手側は、映像で「やっていいこと、悪いこと」を考える自制心が必要なんです。そしてまた見る側にも、それを見抜く力が必要。それがないと、乗せられて悪い状況に追い込まれることだってあるわけです。軍人はカッコイイという映画をつくると、子どもがどんどん軍人に志願するようになってしまう。これは映像、現実とは違うんだということを分からせないといけません。

でもそれは、自分でつくってみれば分かるものなんです。ドキュメンタリー作品であっても、現

実とは違う。１ヶ月かけて撮影したものを１時間に編集した映像で見せれば、その映像はすでに現実とは違うものになっているわけです。何かを残して、何かをカットしているのですから。

総合学習の効果、映像が持つ力

例えば作文や絵を描くのは、基本的にパーソナルなことで、共同でやることではない。それに対して、特に教育の現場での映像づくりは、チームを組んでやっていくという特徴があります。

職業人としての個々の能力ももちろん必要ですが、相対的に必要性は少なくなってきているんように感じます。それだけでは解決できない問題が、今日の社会にはたくさんある。

有史以来、人類の成長はずっと右肩上がりだと思われていましたが、21世紀を迎えた現在、どうやらそれが限界にきているという見方があります。世界規模で言えば、地球温暖化、エネルギー問題、食料問題。国内でも年金問題、少子高齢化問題などさまざまな問題がある。20世紀と21世紀では、社会のあり方がまったく異なるわけです。

また、20世紀は文明が進歩した一方で、もっとも多く戦争が発生し、もっとも多くの人が死んだ時代でもありました。未来の人が20世紀を振り返って本に記す時、「20世紀は最高の時代だった」と書くか「最低だった」と書くか。それは21世紀のこれからの時代のあり方にかかってくるのではないでしょうか。

20世紀に生まれた我々大人と違い、子どもたちは21世紀しか生きていないわけです。そこで教育すべきことは、争いに勝つことではない。みんなと一緒に、競争ではなく共生の力を持たせることが重要です。だから映像を取り入れた総合学習も重要だし、大学に入ってもすぐ就職に役立つようなことだけではなく、人間としての教養を持つ大切さを教えるべきなんです。

これまで日本で国際教育というと、欧米人と仲良くなるための教育ととらえてきました。でも、それもまた変わってきています。どんな国の人ともコミュニケーションがとれる人間を育てることに。映像は、まさにそれです。たとえ英語を学んでも、英語圏の国の人としか話せない。でも映像は違います。

私はよく韓国映画を見るんですが、韓国語は分からなくても、字幕なしで見てストーリーがよくわかるんです。

サッカーで日韓ワールドカップ開催を機に、日韓関係は画期的に良くなりましたが、それをさらに促進させたのが韓流ブームです。韓国人がどんな生活をしているのか、我々日本人は初めて知った。韓国人にとっても、それまで日本の映画などの上映は禁止されていたのが、解禁になって初めて、「日本人は俺たちと同じなんだ」と分かったんです。

これから21世紀的生き方というものを子どもに身につけてもらうためにも、映像を使った学習というものが果たす役割は大きい。本日、お集まりの教育関係者の方々には、ぜひ、映像づくりによってもたらされる効果について理解を深め、学校現場で自信を持っておすすめいただきたいと思います。

最後に、いま、教育現場が大変だと言われますが、大変なのはわかりきっている。これだけのことを変えないといけないわけですから、先生方の頭も大きく切り替えないといけない。精神的にも物理的にも大変なのはわかります。

逆に言えば、総合学習に熱心に取り組み、子どもたちと一緒にやっていくことで、先生方の頭も切り替わる。ですから21世紀の現代には、他の人よりも幸福に生きられるでしょう。

今の世の中だと「自分ひとりが不幸だ」と考える人間も出てきます。21世紀的世界に変わっているのに、切り替えることができないと、不適合状態になって自暴自棄になる確率が高くなるわけです。総合学習を一生懸命やってらっしゃる先生方は、自殺するなんてことは絶対にありえないと、私は思います。自分が難しい状況に直面したときも、自分が輝いていくために役立っているんだと考えれば、苦労も報われるでしょうから。

学校現場から発信された作品はどう進展したか

「ＴＶＦ作品にみる映像制作と教育成果・課題」

・語りと進行　**佐藤　博昭氏**（ビデオ作家、日本工学院専門学校講師、ＴＶＦ審査委員）

profile

さとう　ひろあき　ＴＶＦ審査委員。ビデオ作家。日本工学院専門学校講師／日本大学芸術学部映画学科講師／武蔵大学社会学部講師。ビデオ作家の自主上映組織SVP2代表。1995年より農業情報チャンネルで地域ビデオリポーター養成プロジェクトを継続。06年より日本映像学会理事。また、08年よりヨーロピアン・カルチャー・ファウンデーション（ECF）がオランダで開催するThe One minutes Jr.(1分間映像祭のジュニア部門) の審査委員も務める。
共著書として『ドキュメンタリー リアルワールドに踏み込む方法』『スーパー・アバンギャルド映像術』『映画は世界を記録する』など。

はじめに

私は2000年から審査委員としてTVFに参加いたしましたが、それ以前は学生の作品をとりまとめて応募する側にいました。ずいぶん前から、かなりの数の作品を観てきたつもりです。そこで、TVFの作品のなかで、学校現場から生まれた作品を取り上げながら、学校と映像の関係を掴んでいこうというのが、この第２部の狙いです。

先ほどの寺脇さんの話で、大きな指針、方向を示していただきました。私自身、専門教育、いわゆるテレビマンや映画監督など、プロになるための教育の現場にずっとおりましたが、専門的なスキルだけではなく、どうやら違うものが必要だと思い始めました。特にTVFに関わるようになってから、その思いは強くなっています。

先ほどの寺脇さんの指針を踏まえ、ここではもう少し具体的に、映像の広がりを見ていきたい。そこで現れてくる問題点、課題、それをどう考えていけば良いかをお伝えしたいと思っています。

それではTVFに寄せられた作品のなかから、いくつかダイジェストでまとめたものをご覧いただきます。

（⇒作品ダイジェスト上映）

■ダイジェスト上映作品一覧

『ブラックアイ～花たちの宇宙～』
（第26回・青森県立三本木農業高等学校放送部 青森県）
『忘れないで』
（第30回・杉並区立東原中学校放送部 東京都）
『足・ウラ事情』
（第30回・昭和女子大学附属昭和中学校放送部 東京都）
『龍胆（りんどう）』
（第26回・長野県須坂高等学校放送委員会 長野県）
『5 Sences Travelers』
（第26回・神奈川県立弥栄東・弥栄西高等学校(当時) 神奈川県）
『走れ！江ノ電』
（第１回・川崎市立御幸中学校放送部 神奈川県）
『里山カエル図鑑』
（第30回・姫路市立菅野中学校生物・理科研究班 兵庫県）
『映像詩　曽根干潟から』
（第30回・北九州市立曽根中学校視覚聴覚放送部 福岡県）
『逆上がりできないの　何でだろう？』
（第26回・石津 善久さん　愛媛県）
『学園西遊記』
（第30回・京都市立下鴨中学校パソコン部 京都府）
『A Bridge Over the Ocean』
（第10回・細見勝典さん・原勤さん/Douna Boyntonさん 神奈川県）
『ビデオ家庭訪問』（第11回・山本 清志さん 愛知県）
『心のふるさと』（第25回・山本 清志さん 愛知県）
『メディアと共に』
（第22回・長野県松本美須々ヶ丘高等学校放送部 長野県）
『なにかがくるった！～銀輪公害～』
（第6回・川崎市立住吉中学校放送部 神奈川県）
『高校生のみた沖縄』（第19回・ソフト・コム 長野県）
『漢字テストのふしぎ』
（第29回・長野県梓川高等学校放送部 長野県）
『見えない危機』
（第29回・板橋区立志村第二中学校総合科学部 東京都）
『学びの場が消えてゆく～夜間高校の教室から～』
（第30回・斉藤雅之さん 神奈川県）
『１日』（第25回・兵庫県立伊丹北高等学校放送委員会 兵庫県）
『ミジンコピンピン』
（第27回年・日本大学藤沢高等学校放送委員会 神奈川県）
『レモン』
（第28回・松原 ルマ ユリ アキズキさん 兵庫県）
『パパは彦レンジャー』
（第28回・本町１丁目商店街振興組合 熊本県）

先ほど寺脇さんがおっしゃったように、学校で映像をつくるのはプロを目指すのが目的ではありません。コミュニケーションが目的です。生徒、先生、家族、地域などのいろんな取り組みが映像になっています。ゆとり教育、総合学習がなかなかうまくいかない。いろいろ問題点があるなかにあっても、熱心な先生は映像を使った総合学習に取り組んでいらっしゃいます。

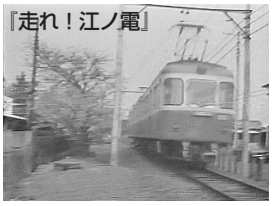
また、大学でも、芸術系学部のほかに社会学部、教育学部でいかに映像を活用するかということに関心が現れています。

そうやって広がってきてはいますが、それぞれがなかなかリンクされていない。教育・芸術・社会という異なった専門を持つ人たちが、映像という道具で１つにつながればいいのですが、なかなかそうはいきません。

今日のこのような場で、協力しあい、映像制作のノウハウや問題点を共有するといったことを、もっと進めていければと考えています。

作品の傾向と分析

さて、教育現場からの作品の変遷として、従来は「放送部」というものが主流としてありました。**『走れ！江ノ電』**など。TVFの初期のころから、学校の放送部は学校発ジャーナリズムの先駆的な存在でした。


『走れ！江ノ電』

また、校風や地域が映像作品を豊かにしているのも確かなようです。先ほどの作品のなかでいえば**『ブラックアイ』**という、農業高校の生徒たちが制作した、昆虫の目で見たときの花の色の見え方は、とてもユニークな作品でした。

『ブラックアイ』

そして、学内活動から地域、社会問題に広がっていく映像もあります。

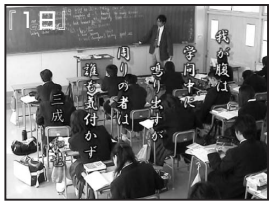
ところで、一般に学園祭の記録というと、以前は学園祭当日の記録が主流でしたが、最近は、準備の段階から記録を始めて、ストーリーを持たせているものが増えています。また一方では、学園祭そのものがひとつのアートライブとして結実した、総合的な芸術パフォーマンスとして展開するものも学園祭の記録には現れてきています。

次に、教師と生徒の共同制作というのがあります。私は今でも楽しいなと思うのが**『ビデオ家庭訪問』**という作品。子どもたちにビデオカメラを持ち帰らせて、家庭を撮影させている。今ではいろんな事情もあって不可能でしょうが、ビデオの可能性を模索する当時は非常に興味深い作品でした。同じ先生が撮った**『心のふるさと』**は、小学校の時に撮ったビデオ映像を成人式になってから先生の家でみんなで見て「おまえはこうだったな」と語り合う。先生との共同制作でした。

『ビデオ家庭訪問』

『心のふるさと』

『１日』という作品は、１日の教室内の様子を記録した映像に、生徒たちが作った短歌が朗読された作品です。



『１日』

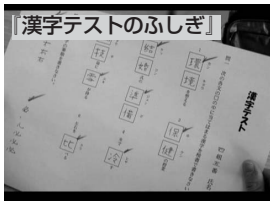
他にも、学校紹介というテーマがあります。従来の真面目な学校紹介ではなく、**『学園西遊記』**という作品は西遊記をまね、生徒が校内を探検するという設定です。楽しんで学校を紹介する。これも先生と生徒の共同作業といえます。

『学園西遊記』

『テレビは何を伝えたか』

さて、メディアリテラシーとジャーナリズムということでいえば、長野県の林先生が指導されて放送部員とともにつくった**『テレビは何を伝えたか』『メディアと共に』**、あるいは07年の**『漢字テストのふしぎ』**という、学校から発するジャーナリズムがあります。特に林先生の指導された作品

『メディアとともに』


『漢字テストのふしぎ』

で重要なのは、つくる、見る、問題点を挙げ、次の作品に活かすという、サイクルができあがっている点です。つくるだけでは終わらない循環型の映像づくりをされています。

『学びの場が消えていく』

『ぼくらの学校なくなるの？』

『ミジンコピンピン』

『京都市電物語』

『レモン』

『パパは彦レンジャー』

『学びの場が消えていく』という作品は、学校そのものの問題を、生徒ではなく学校に関心を寄せている地域の方がつくりました。**『ぼくらの学校なくなるの？』**は、朝鮮人学校の問題を取り上げた作品です。都が朝鮮人学校の建つ土地を、法的な手続きにからめて「返還せよ」という事件をNPOグループが取材して作品にしています。学校と地域との関わりを取り上げた作品といえます。

それから、最近多い傾向として、「遊び」から「表現」に近づいていくものもあります。視野の端のあたりに見える像について作品化した**『ミジンコピンピン』**や、かつての風景と現代の風景を合成したノスタルジックな味わいを醸し出す**『京都市電物語』**などがそうです。**『レモン』**のようなセルフポートレイト作品もあります。

そして地域と子どもたちの共同作業のなかに、劇団や地域の映像制作関係者などが協力して、地域を舞台に、地域を活性化させようという作品**『パパは彦レンジャー』**もありました。

今後の展開の傾向について

こうした作品のなかで、おそらくこれからどんどん広がっていくのではないかというふうに思われるのは次のような作品です。

ひとつは、学校主体での短編映画などの制作。学校と地域の映像制作経験者、関係者が協力してつくっていくということもあり得ると思うのです。昨今は、学校に外部の人が入っていくのはなかなか難しいとは思いますが、NPOと連携して芸術の授業をやっているところも実際にあります。そうしたスタイルが映像にも広がっていく可能性もあると思います。

それから、最近はパソコンによる編集で映像制作がそれほど大変ではなくなりました。カメラも小さく安くなり、個人による作品づくり、映像表現も可能になっています。デジカメや携帯電話でも動画が撮れるようになりました。そういった状況にあって「個人の想い」を表現するアートなどの作品も、今後は現れてくるのではないかと思います。

地域との共同制作によるドキュメンタリーの可能性については、学校発で地域の話題性を取り上げ、たくさんの人に見てもらう活動を、今後、さらに期待したいですね。

実は私は、TVF以外の仕事で、95年から農業情報チャンネルの仕事をやってきました。地域の農業関係者にカメラを貸して、その情報を配信する番組です。例えば、そういった方々と学校とが連動していくようなことが、今後、起こるといいなと思います。

学校が抱える課題

では、学校が抱える課題は何でしょうか。

TVFに関して「応募するにはハードルが高い」とおっしゃる方がいます。「どんな作品をつくればが入賞するんだ」と質問を受けることもある。TVFは技術的な水準が高いから入賞するというわけではありません。我々はそういうものを求めているのではなく、独自の視点や考え方を求めてい

ます。

学校が抱える問題としては「なぜ映像を使った総合学習が必要なのか」を理解できないのがいちばんの問題。寺脇さんのお話しにもありました「なんのために」「プロになるわけでもないのに」と、多くの人が思っている。

でも、逆に「なぜ映像は、いまだにプロを目指すための道具になってしまっているのだろうか」と考えます。美術や書道や音楽の授業は、プロをめざすこととは関係なく普通にやっている。それと同じように映像が普通の授業になればいいと思います。

先ほども言ったように、機材などはどんどん安価で手軽になっており、それほど大きな投資ではないはずです。

あと、指導者がいないとよくいわれます。それはそのとおりだと思います。熱心でキャリアを積んだ先生方もいらっしゃいますが、そうした方々をどう共有するかが問題です。マニュアル化できるのか、できないのか、という問題も含めて検討すべきだと思います。

他には、制作段階の評価、作品の評価も難しいという意見をよく伺います。作品はひとつひとつ違うので､我々も評価の際にはいろいろ考えます。ひとつの基準となるのは、ディスカッションできる内容だったかということです。その作品の世界観や問題意識はディスカッションするに値するだろうかということは、TVFでも議論します。もちろん、点数をつけるとなるといろいろ問題が出てくるし、そういったことも含め、研究会などで議論が待たれると思います。

この間テレビを見ていたら、着衣水泳を小学生に教えていました。つまり、おぼれないようにするためのスキル。外国の水泳では、まず「どうしたら溺れないか」を教えるそうです。少しでも長い時間浮いているにはどうしたらいいかということを。では、日本の場合はどうでしょう。私の記憶する限りでは、25mを早く泳ぐとか、格好よく、形をマスターすることが重視されていたような気がします。

実は、映像も似たところがあって、ビデオを上手に撮ることを学ぶ前に、ビデオカメラを人に向けることでその人を傷つける可能性があることを教えなければいけない。また、意図的に創られた

映像情報に振り回される可能性があることも教えなければいけない。これは間違った情報を信じないための自衛策です。これはリテラシーの「情報を読む」ということに通じることだと思います。

そうやって、映像というメディアの特性・特質についてまず教え、次に楽しんでつくる。そして最後に、撮影や編集、そして表現のテクニックを教えるべきじゃないでしょうか。

余談ですが、本を書きました。受付のところにチラシを置かしていただいていますが。９月に発刊です。その後半では、映像教育に重点を置いています。実際に行なわれている実例も紹介しています。少しでも教育現場の参考になればと思っています。

今後、TVFが中心になってやっていかなければいけないことは､映像教育研究部会のような形で、作品を見せていく場をつくることだと思っています。さらに作品を活用し、ワークショップを開催する。これらすべてを実践できる場をつくることが目標になると考えます。

The One minutes（ワンミニッツ）ビデオフェスティバルの紹介

最後になりますが、僕自身がここ３年にわたって審査員として携わっている、ヨーロッパの「ワンミニッツ・ビデオフェスティバル」をご紹介します。今年は７月３日～５日まで、オランダのアムステルダムで開催されました。

ECF（ユーロ・カルチャー．ファウンデーション）という財団が、ワンミニッツ・ジュニアというカテゴリーをつくってバックアップしていま

す。12歳から20歳までの子どもたち、学生が対象で、１分間の映像をつくって披露するものです。

カテゴリーは３つ。「セルフ・ポートレート」「ベスト・オブ・ザ・ワールド」「インサイド・アウト」。それぞれ３つのカテゴリーの上位６組の入賞者はアムステルダムに招待されます。もともとヨーロッパを中心に活動していましたが、いまでは中東やアフリカからも応募があります。また、そうした応募者、上位入賞者を招待して、上映会やワークショップを行い、食事をともにしたり、コミュニケーションをとることなども行われています。

ワークショップでは、財団が中国とかいろんなところに行って、３日～５日間で30人くらいの子どもたちを対象に１分間映像をつくる。これを年間10～15くらいやるそうです。

さらに、今年は指導者養成プログラムというのがありました。ヨーロッパ各地からワークショップのトレーナーになる人たちを10数名集めて、事例等をレクチャーし、それぞれの国に持ち帰ってワークショップを開催してもらうのが目的です。かなり組織的に展開しています。

ヨーロッパはいまEUというひとつの国のようになっていますが、それぞれの国では移民の問題や言語の違いなどもある。映像づくりには、若者同士が相互に発信して、理解するためのものだと私は理解しました。

ワンミニッツに関しては、はっきりとした目的を持って映像を使うという取り組みのモデルということでご紹介しました。願わくばTVFもフェスティバルを通じたさまざまな取り組みのなかで、若者と映像をつなぎ、教育と地域をつないでいく活動のなかで、中心的な役割を担っていければいいなと思います。

このレポートは「ＴＶＦ市民ビデオフォーラム」でのゲストスピーカーの発言を要約したものです。
（市民ビデオ研究会）

実際に行われている各地の事例紹介とディスカッション

「学校現場における映像づくりの実例紹介」

▼映像を使った総合学習とまちづくりとの融合
〈神奈川県横浜市立滝頭小学校/まちの元気づくり支援拠点「夢たま」〉
▼総合学習をきっかけとした映像制作と部活動の展開　〈東京都杉並区立東原中学校〉
▼地域環境問題に取り組む子どもたちの映像制作活動　〈福岡県北九州市立曽根中学校〉
▼地域の問題を映像を通して探求する市民ジャーナリズム　〈長野県大町北高等学校〉
▼美術コースの必須科目となった映像メディア表現の新たな展開　〈神奈川県立弥栄高等学校〉
▼公共広告の手法を使った映像表現と産官学協働活動　〈滋賀県成安造形大学〉

進行・コーディネーター／下村 健一氏 （市民メディアアドバイザー、キャスター）

profile

しもむら けんいち　1960年生まれ。東京大学法学部卒業後、TBS報道局でアナウンサー等を14年間務めた後、退社。現在は（株）セラフに所属し、市民メディア・アドバイザーとして、市民グループ、学生、子どもたちの映像制作支援活動に東奔西走しつつ、テレビ、ラジオにも出演中。TBSテレビ「みのもんたのサタデーずばッと」（毎週土曜放送）取材キャスター、TBSラジオ「下村健一の眼のツケドコロ」（毎週土曜放送）ナビゲーターでは、大手メディアの報道では見えなかったものにスポットを当て話題となっている。メディアを熟知した独自の視点からの論評や指導は鋭く、優しい。共著書として『ジャーナリズムの可能性』『報道は何を学んだか』など。
※下村健一オフィシャルWebサイト　http://www.ken1.tv/

下村　今日はここまで、寺脇さんが指針を示されて、佐藤さんが理論に落とし込んで解説していただきました。ここからは実践の事例報告という流れになります。１つ１つの事例を紹介しながら、一般の方にとってどう参考になるかを見極めていきたいと思います。

公共広告における映像表現と産官学との連携活動
滋賀県　成安造形大学　竹村 瞳さん

竹村　成安造形大学デザイン科の竹村 瞳と申します。映像放送クラスの３年生です。
成安造形大学の映像系授業では、低学年のときから公共広告のCMなどのビデオ制作を行います。映像を通して社会の問題点を考えレポートする映像社会学と、どのような映像表現が可能なのか技術のスキルを身につけること、そしてメッセージを伝達するコミュニケーション。この３つが映像づくりの重要な柱だと考えています。
10年前には、駅から大学まで走るスクールバス内でイメージCMの放送を試みました。面白い映像になりましたが、個人的過ぎた発想や表現は、分析・評価、そしてディスカッションが深まらないことから、映像社会学をキーワードにするようになりました。
こうした成果は次第に知られるようになり、県内のTV局やCATVでオンエア。実力がつき、中学や高校の生徒さん、京都市の教育委員会の方々を対象とした、初めてのビデオワークショップ「公共広告をつくろう」を実施しました。これはいくつかの学校が共同で行うもので、高校生対象の場合は、１日の講座で11時～12時まで企画会議、絵コンテ制作、午後は１時間ほど撮影、さらに１時間ほど編集。午後４時には上映会を行いました。
それでは映像をご覧ください。

（⇒公共広告CMの上映）

竹村　中高生がつくったCMは、企画を高校生が行い、撮影や編集は大学生が担当しています。

下村　映像をつかった学習をやりたいと考えている先生方が多い一方で、できない一番の理由は「それほどコマ数を多くとれない」というのがあると思います。でも、このワークショップでは１日でできるぶんだけ分業してやっていますよね。

竹村　中高生が公共CMをつくるということは、社会的な意味で、自分たちの生活を見直す機会につながり、意義あるワークショップになっていると思います。実際に放送局で流したCMもあり、なかなか好評だったと思います。幅広い年齢層に見ていただけるよう注意して制作したので、その狙いは達成されたと思います。
実は、いまご覧いただいたCMのなかに、私の作品もありました。企画・監督・編集などをやったのですが、それを見た人のなかには、自分が意図していない部分に反応してくれる人もいて、「そういう見方もあるのか」と勉強になります。

下村　10年前は個人的過ぎる表現だったとおっしゃいましたが、この映像のなかでも「こちらが面白いだけじゃなく、見て面白いものを心がける」という発言があり、ガラッと意識が変わっていますね。

竹村　高校生の作品は、自らを元気づけるものが多く、私も感心しました。長いものでは７～８分の作品もあります。みんなで考え、課題に取り組むことは、メディアリテラシーやジャーナリズムを育てることにもつながります。

　また、大学では映像の作り手を増やす活動もいろいろと行なっています。テレビ局や自治体と組むことも大切ですが、学校教育、社会教育の場でつくり手を増やすことも大事で、映像による社会貢献が可能だと考えています。

下村　成安造形大学が踏んだプロセス自体が、大変参考になる事例でした。まず自分たちでやっていて、やがて中学・高校と連携し、京都市の教育委員会もからんで、さらに琵琶湖テレビでも放送されるようになり、どんどん広がっていっている。

普通の発表と映像発信の大きな違いは、普通の発表は、その人が発表している場で１回限りで終わる。でも、映像発信は発表者を離れていく。外に向かってどんどん広がっていく力というのを感じました。
竹村さん、ありがとうございました。

放送部で映像作品をつくるということ
福岡県北九州市立曽根中学校　馬場先生

馬場　北九州市立曽根中学校で放送部の顧問をしております馬場と申します。作品づくりをとおして自分が感じたことや、生徒と一緒につくるなかで感じたことを、これから話していきたいと思います。
最初に、入賞した『映像詩　曽根干潟から』（TVF2008 優秀作品）について説明させていただきます。曽根干潟という大きな干潟で生きている生き物をとおして環境問題を考えるという内容です。

作品をダイジェストにしたものがあるので、ご覧ください。

（⇒『映像詩 曽根干潟から』ダイジェスト上映）

馬場　賞をとったあと、地元の新聞社などの取材を受けたのですが、よく聞かれたのが「日頃、環境問題に関してどんな取り組みをされているので

すか」ということです。「企画立ち上げのときから、そういう取り組みがあったでしょう？」と。でも、そういうつもりではつくっていないんです。自分がこの学校にきたときに、「干潟の映像が力を持つんじゃないか、干潟で作品をつくったら面白そうだ」と漠然と思ったのが発端でした。

また、曽根中へ進学する２校ある小学校のうちの１校は、干潟でゴミを拾うなどの取り組みをしており、その経験のある子どもたちは、三年生になって作品をつくろうとなったときに「干潟を舞台にしたい」と言ったんです。

もうひとつ、マスコミの人によく言われたのが「すごくミーティングをしながら脚本を書いたんでしょうね」ということ。実際はミーティングはほとんどやっていません。２人の生徒が中心となり、その他に５人の生徒が入れ替わり立ち代わり干潟に行って取材をするのですが、その子たちと一緒に行って撮影しているとき「どう思う？」「どんなこと感じた？」と聞くんです。で、その答えをもとに脚本を練っていくんです。

だから作品の方向性は、常に現場で感じたことに基づいて決めています。そういう方法でやろうと最初に決めていたんです。

取材を重ねるなかで「みんな環境問題についてどう思う？」と聞いてみると、「自分たちもそうだけど、知っているけどやっていない」という答えが多かった。取り組みをしている人はいても、広がりがない。だから、作品の目的は、そうしたことを干潟の姿を通して訴えられないかということでした。

そしてもうひとつ、僕が感じて生徒に提案したこととして「生き物と生徒の距離感」というのがあります。最初に巻貝が出てきますが「気持ち悪い！」と言って、生徒は触れない。他の生き物に対しても遠慮がちでした。でも途中から干潟の生き物に対する距離感が縮まっていった。実際にはすぐに縮まったわけではないですけどね。

作品の構成を練るときは苦労しました。最初は、巻貝を主人公にしようかという話も出たんです。でもどうしても話が広がらない。それなら干潟全体の話にしようと。そこでタイトルが「映像詩」に決まった。それでも、最初の構成と結果的にできたものと違ったんです。

ここで、最初に考えていた構成を、実際に映像でご覧いただきます。

（⇒映像上映）

馬場　実はTVFの講評で「生徒の声をもっと聞きたかった」と言われました。僕もそう思うんですが、もともとNHK杯に出すためにつくったので８分という制限があり、長くなり過ぎてしまうので構成を泣く泣く変えました。

いろいろな制限があるなかで、作品の完成が危ぶまれた時期もありました。でも、いままで干潟を見てきた生徒が、これは自然の姿そのままだと思い込んでいたのが、実はそうじゃないことがわかった。それは自分たちが一番伝えたかったことですと言っていた。それを聞いて構成も決まり、完成へと漕ぎ着けました。

下村　確かに、その発見がストーリー上での最大の発見ですよね。先生も、それがテーマになってくることを、現場で発見したわけですね。

馬場　はい。それは、漁師さんへのインタビューで分かったことなんですが、それがなければ、もっと違った作品になったかもしれません。他に、環境局にも話を聞いているんですが、作品ではカットしています。生徒がいちばん「感じた」のが漁師さんの話だったのです。

映像作品をつくることは、インタビューや取材などをするなかで、感じたこと、見つけたこと、それを形にして伝えること。それを見ていただいた方にも、何かを感じてもらえるのが理想ですね。

下村　メディアテラシーの授業をやっている先生のなかでよく聞くのが、「ゴールが、行く先が見えない」ということです。それが不安だと。結構、最初から最後までカチッと決めてかかる先生方が多いんですよね。「ここで生徒に気づきを与えよう」とか。しかし、そうすると本当に生き生きとした発見はできない。そういう意味で、馬場先生は勇気があるなと思いました。方向性を現場で決めている。なかなかできることではありません。

馬場　私も怖かったですが、やっていけば何か見つかるのではないかとも思っていました。ただ、あくまでも部活で、この年齢の生徒だからこそ出来た部分もあります。授業でやっていたら難しいこともあったでしょう。

下村　なるほど、そこが課題でもありますね。
ありがとうございました。

ハンセン病回復者に学ぶ

東京都杉並区立東原中学校　加藤先生
（現・江戸川区立鹿骨中学校勤務）

加藤　初めまして。今は江戸川区の鹿骨中学校におります加藤と申します。杉並区立東原中学校での放送部を中心とした実践をご紹介します。

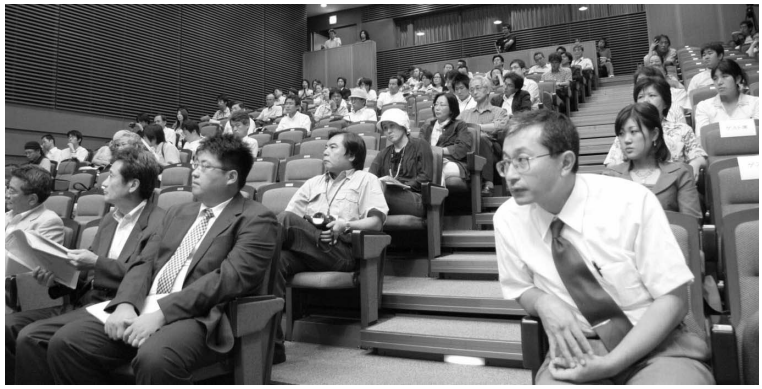
東原中学校は、東京都内の中学校の中でも、放送部と学校全体が幸せな結びつきをしている数少ない学校だと思います。給食時間帯に、毎日、部員がインタビュー取材をした自主制作番組を流しているんです。放送するのは音声だけですが、インタビューはビデオカメラを使ってやっています。顔が映っているから編集が楽なんですね。生徒だけでなく、保護者の方々も、放送部がカメラを向けると普通に自然に答えてくれます。これは本当に貴重なことだと思います。
毎年、NHK杯に参加しているので、「今年は何をつくろうか」と考えるわけですが、最初はラジオ番組としてハンセン病問題に取り組むことを考えました。インタビュー素材中心になると予想できたので、それだけで映像番組を構成するのは非常に難しい。そうしたことから最初はラジオ番組を作ったのですが、全校でハンセン病に関するアニメーション映画を見て勉強し、東村山市にある全生園の回復者である天野さんにきていただいて、お話しを聞きました。
話を聞くなかでは、放送部部員からも「これは酷い、僕がそういう環境に置かれたら怖い」という意見が出ました。そして、番組をつくり始めたのですが、完成した７分のラジオ番組のなかに、ハンセン病問題のなかで一番重い問題が含まれていたことに、後で気づいたんです。それは、重監房の話や、中絶などで子どもを生ませないように強制されたことでした。
そのラジオ番組をお聞きください。

（⇒ラジオ番組『人間になりたい』上映）

このような話を聞いて生徒は圧倒され、最初はどのようにまとめていいのか分からなかったのですが、いま聞いていただいた部分を中心にして作品をつくることになりました。話を聞いた以上、なんとかして伝えたいという気持ちから、映像作品としてまとめるきっかけになりました。
映像作品にする場合、話をお聞きした天野さんの顔は映せますし、いろんな写真もお借りできるのですが、動画がない。そこで、最初に作ったラジオ番組を聞いた方へのインタビューで、動画を構成することにしました。

（⇒『忘れないで』（TVF2008 優秀作品）
ダイジェスト上映）

この映像を見た方のなかには「これはこの場だけで終わらせてはいけない。いろんなところに持っていって上映する価値がある映像だ」といっていただき、非常に励まされました。
この作品をTVFに出して、入賞のお知らせをいただいたときには、ビックリしたのと同時に「入賞になったということは、全国に配信してもらえる」と、本当に嬉しかった。配信されたことでいろんなご意見をいただきました。
インタビューを受けていただいた天野さんは、作品をご覧になって「怖かった」とおっしゃていま



した。差別されていた過去のことを思い出した、と。生徒たちからも、天野さんに映像を見せたことについて「トラウマを思い出させてしまったかもしれない、悪かった」という声がありました。
ハンセン病資料館の方々にも見ていただいたんですが、ハンセン病の患者だった人の多くは亡くなっていて、全国でも2,000人くらいしかいない。でも、これだけひどい人権侵害があったことを後世に伝えていって欲しいから、ぜひ若い人たちに見てもらいたい、とおっしゃっていました。

下村　広島の中学生が平和公園で被爆体験をもつおばあちゃんにインタビューしている作品があったのですが、インタビュアーの中学生は話を聞いていて立ちすくんでしまう。その後、「どうだった」と聞いたら「思い出させてしまったようで、悪かった」って言うんです。だから「じゃあ聞かないほうがよかったかな？」って聞いたら、しばらく考えて「でも、聞かないとみんなに伝えられないから、やっぱり聞くべきだと思う」と。「難しいよね」っていう会話をした覚えがあります。
この作品でも、伝えることの意義と、話を聞くだけで人を傷つけてしまう、伝えることの恐ろしさを、インタビューした生徒さんは直面してしまう。それはとても貴重な体験だなと思います。
また、発信した後のフィードバックを聞くことも含め、教育として完結するんだと思います。

加藤　全校生徒ではないのですが、１年生に作品の感想を聞いていますので、ご紹介します。

「私はとてもいたたまれない気持ちになりました。本当は治る病気なのに、ほとんど感染しないのに、人の心を持っているのに、世間に誤解され、差別され、人として社会に生きられなくなって、とても悲しくなりました。なぜこんなに悲しい差別がおこったのでしょう。理由を聞かれても私は理解できません。でも、もし私がこの時代に生きていたら、ハンセン病の患者さんたちを差別していたかもしれない。本当に怖いと思いました。申し訳ない気持ちでいっぱいです」

下村　最後にひとつだけ。この後、どう広がっていくのでしょうか。

加藤　実はこの番組の後も、全生園に行って取材をしています。関わったものの責任として、このまま終わらせるわけにはいかないと感じています。

下村　どうもありがとうございました。
最初のほうのお話しにもありましたが、きっかけは「映像作品をつくるにあたって、何を題材にしよう」という、題材探しのために地域と関わるということだったのですが、途中で目的が逆転している。地域と関わり続けたいために映像作品をつくる。この転倒は本末転倒ではなく、すごく大事な転倒。地域と関わるために映像をつくることが本質なんですね。そこに子どもたちが気づく、転倒の面白みを生徒たちに味あわせるのも大切だと思います。

マルチメディアアート制作現場
神奈川県立弥栄高等学校　米山先生

米山　こんにちは。先ほどの佐藤先生がお話しされたTVFの歴史のなかで、アートライブという話がありましたが、ここでは、有志が100人くらい集まるイベントの制作現場を紹介します。また、アートライブに行き着くまでの授業、１年生では必修になっている映像メディア表現と、２～３年の選択科目マルチメディアアートの紹介をしたいと思

います。アートライブで重要なのがCGなのですが、それの基本的な作り方を授業のなかで学び、課外活動としてアートライブで成立させるという流れです。
いまからお見せする映像は、アートライブ用につくって舞台で上演したものを、５台くらいのビデオカメラで撮影・編集し、販売するためのプロモーションビデオです。ご覧ください。

(⇒「オリジナルDVDのお知らせ」上映)

下村　「DVD販売中」と出ていましたが、公立高校でここまでできるのは、校長先生などに理解があるからなんでしょうか。

米山　ウチの校長はとても派手なことが好きなので。
実は授業のなかで学校のPVをつくったりして、学校に貢献もしているんです。その映像もご覧いただきましょう。

(⇒「学校紹介PV」上映)

米山　実際の授業は、１年生はフォトショップというソフトを使った「フォトショップアニメーション」というのを教えています。

(⇒「フォトショップアニメーション」上映)

米山　そして２年生になると「マルチメディアアート」という授業があります。これは、フラッシュというWebのアニメーション制作ソフトと、プレミアというビデオ編集ソフトを使っています。
最初に、10秒くらいのフリーの音楽ネタを再構築してオリジナルの音楽を作成。そこからイメージを膨らませてアニメーションにしていきます。普通は目で見た情報を加工するのですが､違う感覚、耳からの情報から映像をつくっていくという、五感をフルに生かした映像づくりを学んでいます。
音楽とシンクロしているので、単純に見ていて気持ちがいい。そういう感覚を養っています。

(⇒「マルチメディアアート」上映)

米山　それから、モーションタイポという手法があるのですが、文字の形と意味を利用して、イメージを膨らませる授業もやっています。

(⇒「モーションタイポによる映像」上映)

米山　そして、モーショングラフィック。デジカメやフォトショップで取り込んで加工画像を、フラッシュに読み込んで動かす。パラパラマンガの原理で静止画を動かす手法です。

(⇒「モーショングラフィック」上映)

米山　また、３年生の選択科目で、セリフを入れる授業もあります。

(⇒「セリフ」上映)

米山　あと、３年生の選択で「ひとりアートライブ」があります。自分でCGをつくり、作者がパフォーマンスをする、１人で全部こなしています。

(⇒「ひとりアートライブ」上映)

米山　ここで得られる成果として、いろいろな分野を経験することで、普通ですと舞台監督がいて全部仕切っちゃうんですが、それぞれがディスカッションし合って積み上げていく。コミュニケーションを重要視しているということです。
また、出演者自身が一人一人考えて、リハーサルでつくり込んでいく｡現代の演劇の考え方ですね。

(⇒「文化祭でのリハーサル」上映)

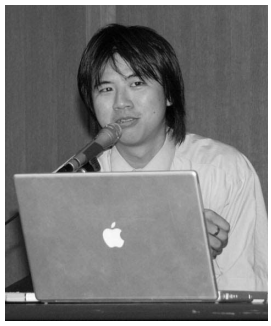
米山　ということで、大勢でつくると自分のつくりたいもの以外の要素も出てきて、コミュニケーションをとりながら微調整していく。手間はかかりますが、出来上がったときに達成感、チームとしてのまとまりが生まれてきます｡学年や学科を超えて、得意分野のスペシャリストが集まって、密度の濃い人間関係が生まれています。

下村　なるほど。ありがとうございました。
私が先日ビデオリテラシーに関して話をさせていただいたときに集まったのは家庭科の先生でした。本当にあらゆる教科に映像を使ったビデオリテラシーというものが広がりつつあると実感しています。

『声にならない声』が声になった瞬間

長野県大町北高等学校　椿先生

椿　私は教員になって今年で５年目、放送部の顧問も５年目になります。今日は『声にならない声』という、大町北高校放送部が一昨年の12月に初めて制作した番組の制作過程を中心に、お話しをさせていただきます。



ウチの学校が毎年出品しているのは、NHK杯全国高校放送コンテスト、そしてSBC杯新人放送コンテストの２つです。NHK杯の方のテーマは「高校生と放送」で８分間のビデオ作品をつくります。一方、SBC杯の上位大会である全国高等学校総合文化祭の方は「郷土の話題」というテーマで５分の作品をつくるというものです。なので、多くの学校は地域のお店の紹介や人物の紹介をするようですが、ウチの放送部は初めてつくったとき以来、地域の大きな社会問題を取り上げることが自流になっているようです。今日はそのなかで『声にならない声』の話をしていくわけですが、まず映像を見てください。

(⇒『声にならない声』上映)

椿　長野県の北部に「国営アルプス安曇野公園」という、大都市から来た人たちを自然に親しんでもらうための公園をつくる計画が進んでいました。ただ、バブル期に立ち上がった話なので、莫大なお金を使っていたにもかかわらず、全然話が進んでいなかった。

最初は「こんな公園はいらない」という作品を作ろうと思っていたんですが、取材をしていくなかで、建設現場を案内をしてくれた人がとてもいい人で、生徒も「反対っていう気が失せてきました」と言ってきた。で、取材をしていくうちに分かったのは、国営公園に反対している人は確かにいるんだけれど、その声が出せない現実があるらしいということ。それを伝える番組にしようということになりました。

この作品は３つのバージョンがあるんですが、本日はいちばん最後に作った、全国大会に出品したバージョンを見ていただきます。

(⇒『声にならない声』第３バージョン上映)

椿　見ていただければわかるように、声を加工して、画面も黒くして発言者が特定できないようにしてと、テレビ等でよく見る手法を使っています。

これは、最初につくったバージョンでも、わりと気楽な感じで取り入れていた手法でした。最初のバージョンはこれなんですが……。

(⇒『声にならない声』第１バージョン上映)

椿　最初のバージョンでは黒い画面が全５分中２分続くんですね。県大会で最優秀賞をとったんですが、偉い方から説教を受けました。講評でも「このような作品は二度と出てこないでほしい」なんて言われて。

　どうしたらいいのかわからなくて、当時、３人いた部員と相談して、「画面が黒い部分が長いからだめなんだろう」ということで、その部分を減らして、顔出しOKの人の映像を入れて、次のバージョンを完成させたのがこれです。

(⇒『声にならない声』第２バージョン上映)

椿　このバージョンを見た長野県の先生から「つまらなくなったね、県大会のバージョンのほうがよかったよ」と、さんざんに言われてしまいました。作っている本人たちも、どうなんだろうと、いろいろ声をきいてみようというつもりだった。でも、最初のバージョンが良かったという声もあり、それではダメだという評価もありで、さあどうしようと。

最終的には、最初に見ていただいてように、反対だとかいうことではなく、「声を出せない」ということを打ち出していこうということになり、オープニングから黒い画面で「これは何なんだろう」と思わせて、地域が声を出せないんでだという内容にしました。

下村　そういった経緯を経て、放送部員が学んだことは何ですか。

椿　構成を考えるようになりました。いままでは取材経過を追って、取材の順に編集していくだけでしたが、このテーマを伝えるにはどういう順番にし

なければいけないかということを掴めるようになりました。

下村　となると、結局、放送部員たちは、最初のバージョンの何が批判されたと理解したんでしょう。

椿　批判されたのは、「黒い画面や声を変える手法だと部員がやっていてもバレないじゃないか」ということだったんです。ただ、僕らとしては顔を出さない、声を変えることを条件し取材をしているので、割と安易にテレビの方法論を真似してしまったんです。

下村　なるほど。プロのテレビマンが作るとすれば、黒画面ではなく、その時の言葉を象徴する「何か」を映したりするでしょうね。そうすれば違和感は大幅に緩和される。
でも子どもたちはテクニックに走らず、「顔を撮らない約束だから黒い画面にしよう」と、とてもストレートな表現方法をとった。そうしたら批判を浴びて、行ったり来たりでなかなか答えが出なかった。でも、答えが得られなかったことが、この作品の最大の教育効果ではないかと、私は思いました。
こういうことを実践していると、「はっきりした答えがだせない」と悩んでいる先生方も多いですが、実社会では明確な答えがあることのほうが少ない。それを伝えようとするときに、戸惑うことは当たり前で、とてもいい実社会との接触経験をしたなと思います。
　これからも大いに悩んで、作品を撮り続けてください。どうもありがとうございました。

映像を使った総合学習とまちづくりとの融合

神奈川県横浜市立滝頭小学校　川村校長
針持先生
滝頭地域、元気づくり支援拠点「夢たま」時任代表
（NPO法人 夢・コミュニティ・ネットワーク）

川村　こんにちは。私からは『映像を使った総合学習とまちづくりとの融合』と題して、２つのことがらについてお話しをしたいと思います。

ひとつは滝頭ビデオフェスティバル開催の目的と構成についてです。地域の活性化と街の元気づくり推進として、横浜市と磯子区役所、滝頭地区連合町内会など、そして日本ビクターさんが連携して、事業を企画するということで、私ども滝頭小学校も加えていただいて、平成18年11月からスタートしました。
会合を重ね、まずは地域の住民同士が知り合うことが大切ではないかということで、町内会、自治会、商店会などが、ビデオ映像で紹介しあったらどうかということになりました。
ビクターさんからの提案もあって、ひとつのステップとして、滝頭地区でビデオフェスティバルを開催しようということになりました。TVFという名称をそのままいただいて「滝頭ビデオフェスティバル＝TVF」ということで、平成19年度の活動が始まりました。このことについては「夢たま」さんが後ほど詳しくご紹介いたします。
そんななかで本校の５年３組が東京ビデオフィスティバルに出品。また、６年２組も、地域内にある滝頭市場の火災・焼失を機に自分たちの地域を良く知ろうという、それぞれの目標に向かっての活動が始まりました。
本校は「街と響き合い輝く子」というのを教育テーマを掲げており、「自分の生活の中から課題を見つけ取り組んでいくとともに、その力を生活に活かす学習をする」ことを重視しています。映像をとおした総合学習と町づくりとの融合というのをひとつのヒントとして、今後も探求的追及的総合学習を進めていきたいと考えています。

針持　滝頭小学校（６年２組担任/当時）の針持と申します。児童の活動の様子、成果、課題についてお話しをさせていただきます。

いまお話しがあったように、本校では５年３組と６年２組が滝頭ビデオフェスティバルに参加させていただきました。そのなかから、６年生の取り組みについてお話しをさせていただきます。

本校は周りをたくさんの商店街に囲まれた商業地域のなかにあります。活動の発端は、学校の近くにあった滝頭市場というところが、火災で焼失してしまったことでした。約80年の歴史を誇る市場で、子どもたちにとっても非常になじみ深い身近な場所でした。火災後、本校では「滝頭市場の皆さんを励ます会」をつくり、ビデオレターを手渡しました。このことが、映像を表現方法とするひとつのきっかけとなりました。

生徒の中から「自分たちの住む滝頭という街を、見つめ直そう」という意見が生まれ、そこには、火災の時に感じた地域の人たちの思いや歴史をもっと深く知りたいという思いが感じられました。そこで、題材ごとにグループを組み、「滝頭のお店を紹介する」「滝頭の歴史を紹介する」「滝頭の安全な場所、危険な場所についての取り組みをする」「滝頭小学校の歴史、活動を紹介する」という４つの作品をつくることになりました。

「滝頭のお店を紹介する」では、お店の人や、お客さんにまでインタビューを行いました。また「夢たま」さんのご協力により、地域の丸山市場を中心に、お店の特徴や気をつけていること、お店の方の思いなどを取材することができました。

「滝頭の歴史を紹介する」では、コミュニティハウスの館長さんや、地元に昔から住む方から貴重なお話しを伺うことができました。誰にインタビューをすればいいのか自分たちで考え、よりよい情報を集める活動となりました。

「滝頭の安全な場所、危険な場所についての取り組みをする」では、地域の子ども110番の家を地図に表し、視覚的に分かりやすく表現することに取り組みました。また、下校時に学校を見守ってくださる「安全見守り隊」の方々にもインタビューを行ない、その思いに触れることができました。

「滝頭小学校の歴史、活動を紹介する」では、１年生や学校説明会で、滝頭小学校のことを分かりやすく紹介できる作品づくりを目指しました。

こうした活動のなかで、子どもたちは地域のことを知り、たくさんの地域の方々の思いを知ることができました。映像の編集ではコンピュータを使用しましたが、子どもたちはどんどん操作をマスターしていき、子どもたちの創作意欲を喚起するものでした。

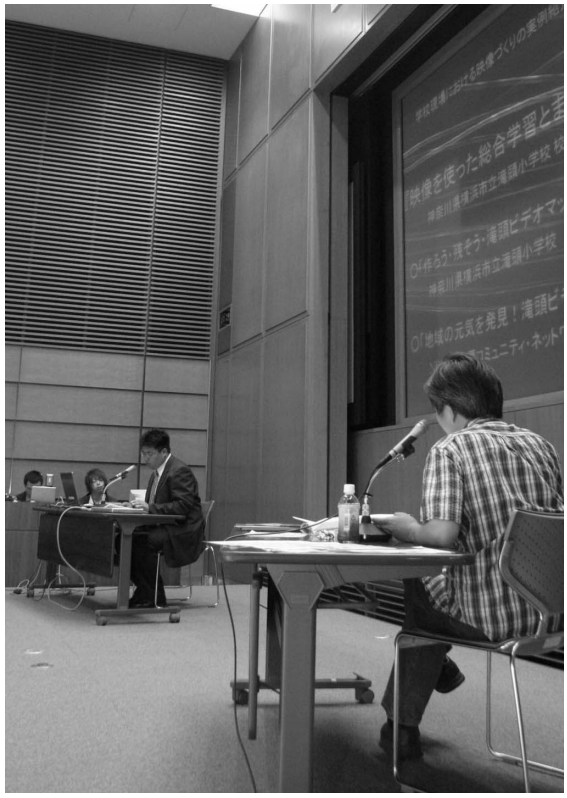
さらに、この活動を通して、一人一人の個性が際立ち、自分の得意分野を活かして活躍する場を得ることができました。さまざまな持ち味がひとつの作品づくりに集結し、「この子にはこんな一面があったんだ」と知る機会にもなりました。

もちろん小学生ですから、構成や編集の内容は拙いものがありますが、こうしてつくられた作品の一部をご覧いただきます。

(⇒作品の上映)

針持　子どもたちは意欲的に取り組みましたが、いくつかの課題も出てきました。

ひとつは機材の不足。日本ビクターさんからビデオカメラをお貸しいただき、１グループ１台を確保することができました。また、画像編集できる



コンピュータはスペック的に校内に１台しかなく、滝頭ビデオフェスティバルの直前はフルに稼働している状態でした。
二つ目は活動時間の確保という問題です。最終的な編集の段階では、作業に関わる人数は限られており、実際に編集を行なう以外の生徒はやることがない状態も生まれました。また、グループが大きくなりすぎ、有効的に作業にかかわれないこともありました。
さまざまな課題も残りましたが、実りの多いものでした。小学校卒業という区切りの時期に、自分の住む地域を振り返り、たくさんのたちの思いに触れたことは、得難い体験だったと思います。同時に、みんなで作品を完成させた達成感、所属感や一体感をもって、子どもたちは卒業していきました。
「夢たま」様のご協力もありまして、地域で取材を行うことができましたし、地域の方々も快く取材に応じていただきました。他にも様々なご支援ご協力を得ることができました。ありがとうございました。

下村　こういう活動をしていると、否応なく地域との関わりがでてきます。そのときに、地域側も「何か地域と学校とで取り組みたいと思っていたが、何をやっていいのかが分からなかった」と、すごく歓迎されることも多いようです。

では（その地域側）「夢たま」の時任さん、よろしくお願いします。

時任　NPO法人夢コミュニティネットワークの時任と申します。平成18年度10月からスタートした、横浜市の地域活性化の拠点で、愛称が「夢たま」と呼ばれています。私たちは地域の元気を応援するNPOで、街のコーディネーターとして人と人をつなぐ役割をしています。
滝頭ビデオフェスティバルは滝頭地域で行い、19年度のなかで10月、３月の２回のイベントを実施しました。
テーマは「１年間を通じて滝頭の元気を発信しよう」というもの。ビデオづくりを活用しながら、地域で互いに知り合って、みんなで元気になっていこうということです。

成果としては、地域コミュニティが活性化したと言い切れると思います。地域の人や団体、学校、商店街などで繋がりをつくることで、地域が元気になるということです。
具体的な取り組み内容はスライド写真に沿って紹介します。
まず、滝頭小学校の５年３組を対象に「撮影教室」を開きました。子どもたちは、このとき初めてビデオカメラに触れました。
続いて「ありがとう滝頭市場」。針持先生の話にもありましたが、滝頭市場の方々が、火災にあって焼失した後、82年間地域の方々にお世話になって何かをしたい、ということでご相談いただいて、お店は全部焼けてしまったけれど、最後に大売り出しのイベントをしましょうということになりました。地元の自治会・町内会にもご支援いただいて、イベントを開催しました。
「ビデオの楽しみ方教室」――先ほどのイベントの撮影した模様を作品にして、市場の方をはじめいろんな方に見ていただきました。
「秋のビデオフェスティバル」――10月に実施しました。応募作品36本。小学校や地域のサークル、また初めてのフェスティバルだったので、地域以外の方や東京ビデオフェスティバルの常連さんからも応募をいただき、大いに刺激になりました。小学校や自治会、商店会など地域全体の協力をいただき、町内会の会館が満杯になりました。
「キッズさつえい隊」――これは商店街のお店紹介ビデオを、商店街と地域の子どもたちを中心に（撮影とインタビュー取材を行い）、ウチのNPOにインターンシップできていただいた専門学校生とで、みんなでアイデアを出しながらつくっていこうと取り組みました。
これに関しては小学校というくくりを離れ、あくまでも地域全体ということで呼びかけました。他の小学校の子どももいました。
「春のビデオフェスティバル」。３月に行なわれま

した。会場は滝頭小学校体育館。私たちがいちばん大事にしたのが、街のいろいろな方が参加するなかで、それぞれの持ち味を発揮できるような総合的なフェスティバルにしたいなという思いがありました。応募されたビデオ作品の紹介のほかに、インターンシップの学生たちが地域に出向いて撮影した「地域クイズ」、おやじの会のおやじたちのよるルーレット大会など。単なる上映会ではなく、みんなが持ち味を出し合い、フォローしあって、一緒に楽しもうというイベントでした。
最後に、滝頭ビデオフェスティバルは「地域の人たちによる地域のビデオフェスティバルだった」と考えております。力を合わせて一緒に作り上げていくことが、喜びとなり、みんなの元気となる。そんなふうにいま、思っています。

下村　どうもありがとうございました。
拝見していると、学校（地域）の取り組みに地域（学校）が入ってきたときのパワーアップぶりは本当にすごいなと思います。それぞれ単体だとここまではいかない。ビデオカメラがあることで、そうしたことがとてもスムーズになる、とても参考になる事例だと思います。
また、針持先生がおっしゃっていた「所属感や一体感」というのも、職業ジャーナリズムとの大きな違いではないかと思います。職業ジャーナリズムは外側に身を置いて、客観的な視点をとろうとしてしまう。でも、学校ジャーナリズムは、「私は」を主語にして語れる子どもたちを育てる側面があり、そういう意味で教育効果はとてもあると思います。
「あなたの生徒たちから学ぶことを恐れるな」という外国の格言がありますが、メディアリテラシーの取り組みにおいては、先生も生徒も、地域も一緒のスタートラインで一緒に交わりあう。
教師、生徒、地域の接点にビデオカメラがあるという基本の構図をおさえておけば、いろんな形がとれる。自在な形があるべきだと感じました。

　とういことで、第３部では６つの事例が紹介されました。映像づくりの活動の中に、それぞれ独自の特徴があり、子ども達はもちろん、指導された先生、そして地域で携わった方々にも得るものがあったようです。本当は、それぞれの紹介に対して、もっと深く追求して、会場の皆様にディテールを分かりやすくご案内したかったのですが、残念ながら１つの発表に20分ということで、あまりにも時間がなさすぎました。このフォーラムを企画したときの詰めが甘かったようで、次回の機会にはもっと深いところまで掘り下げ、学校現場における映像づくりの魅力をお知らせしたい。そして、フォーラムを聞かれた方もより意欲を高められるようにしたいと考えています。
ただ、今日の話は貴重なものです。来場された方が得られた情報は、学校現場で教育に刺激を与える内容なのは間違いありません。ぜひ、ご自分なりの展開を模索していただきたいと思います。
発表された方々、そしてお聞きになられた皆様、ありがとうございました。

このレポートは「ＴＶＦ市民ビデオフォーラム」でのゲストスピーカーの発言を要約したものです。
（市民ビデオ研究会）